

---

# 図書室のヴァレンシュタイン

はねとふゆこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

図書室のヴァレンシュタイン

### 【Nコード】

N6439S

### 【作者名】

はねとふゆこ

### 【あらすじ】

ある深い悩みを抱える文学少年。彼はある日、学校の図書室で二人の人物と邂逅する。

「あの小説読んだよ。滅茶苦茶おもしろかったよ。あれは絶対、流  
行るね。アニメ化も絶対するだろうし、本ももつと売れるな。続き  
が気になってしょうがないよ」

隣の席で大仰にジェスチャーを交えながら、本の魅力を語る友  
人の声に、俺は静かに耳を傾けていた。

俺が黙っている間も、彼はその作品に触れた自分が英雄なのだ  
といわんばかりに、その魅力を語るのだ。

俺は今どんな顔をしているのだろう。きつと鏡でみたら、思わ  
ず声をあげてしまうような、しかめっ面だと思う。始めは愛想笑  
いを浮かべていたのだけど、それはすぐに蛾のように溶け落ちた。

彼が話終わるまで待つていようと思っていた。しかし、どうに  
も我慢できなかった。

こうなるともうだめなのだ。彼という人間を始めから受け付け  
なかつたみたいに、その声をこれ以上聞きたくないと思ってしまう。  
その顔を殴りつけてやりたいとさえ思う。

一度そう考えてしまうと、その感情は圧倒的な怒りとなって際  
限なく湧きでてくる。胃の辺りに無数の虫が蠢いているかような不  
快感を感じる。

我慢の限界だった。

「なんだよそれ」

恐ろしく冷たい声が喉元から吐き出された。

「……え？」

言葉を聞き取れなかったのだろうか。それとも耳を疑って出た  
言葉か。どちらでも構わない。

把握するまで何度でも。

「なんなんだよ、それはさあ！」

叫んだ。机を拳でドンと叩き、そして立ち上がる。

「なにが……？」

「お前のその感想。滅茶苦茶面白かった、とかアニメ化するな、とか。面白いのは解ってるんだよ、だから勧めたんだから。俺が聞きたいのはさ、もっと具体的な感想なんだよ。例えば、好きな登場人物について語ってもいい。どこかのシーンを切り取ってもいい。作者の思いとか、あとがきの内容とかそんなことでもいいんだよ。お前みたいに客観的事実を大口で捲し立てられたって、その作品の魅力なんて一つも伝わらない。俺が望んでるのは、本の巻末にある著名な作家の解説みたいな、勿論そこまで高尚でなくても構わないさ。素人なんだから。だけど素人なら素人らしく、プロの作品に難癖つけるくらいが丁度いいんだ。玄人振ってさ、アニメ化するだろうな、とか。お前はプロの編集者か？ 違うだろ。文学の嗜みもない素人以下の人間だろ？ それとも全く思いつかないのか？ そういう感想しかでてこないのか？ 頭からっぽにして、ただ文章を追っていったのか？ そうじゃない限り、そんな腐った感想出てくる分けない」

一気に捲し立てる。友人は一步後ずさって、俺の顔を驚愕の表情でみつめる。俺はその顔をただ、睨み続けていた。

「……は？」

程なくして、彼は不意に口角を釣り上げた。そして引いた身を戻して俺との距離を詰める。俺の視線を射返すように、その表情をきつく結んだ。

「なにそれ、受け狙ったの？ 全然面白くねえよ？ お前が勧めるからさ、仕方なく読んでやったのに、なにその態度。感想ならあるよ、言ってみようか？ 糞つまんなかったよ。気使ってやったの。わかる？ あんなつままない本勧められて、それで素直につまんないっていったら、可哀想だろ？ だから」

瞳孔を開き、とって付けたような怒りでもって言葉を浴びせ返す。俺をきつく睨みつけ、萎縮させてやろうと威圧する。俺は溜息をついた。

さっきのセリフと、そしてその後の態度。何をとっても反論するに値しない、取るに足らない人間の証明。途端に俺は、彼という存在を人間以下のその辺に転がる石ころみたいなものとして見なし、口を開くのをやめた。

黙って席について、彼を無視して本を開く。

「なんだよ、悔しいのか？ 自分の好きな本が貶されて、泣きたいか？ お前だって似たようなもんじゃねえか。大口叩いて、どうせ大した感想も抱いてないんだろ？ 読書家振ってさ、具体的な感想が聞きたかったとか、言いたかっただけなんじゃねえの？」

喧嘩に於いて、相手が何もアクションを起こさないというのは最も優位に立てる最高のシュチュエーションだ。口喧嘩だってそれは変わらない。黙ってる相手に一方的に罵声を浴びせるだけで、本人も、そしてそれを見てるギャラリーにも、そいつが圧倒的な優位に立つてるように見える。

今この教室にいる奴ら全員に、俺は彼の態度に萎縮してしまっているように見えるだろう。喧嘩することを放棄して、憐れに逃げ出す小心者。

わかっている。けど、そんなことにいちいち腹を立てて、感情的に罵声を浴びせあって、一体何になるというのだろう。非生産的な事はしたくない、とクレバー振る訳じゃない。ただ単純に、もう彼とは話したくないと思った。それだけのことだ。

無視し続ける俺に興味が失せたのか、彼は大きく舌打ちをして教室を出ていった。彼がいなくなつた後の教室では、クラスメイト達がヒソヒソと何か話していたが、俺の耳には何も届かなかった。

俺が彼と出会つたのは、教室でそんな喧嘩をやらかした日の放課後だった。

その日も家で読むための本を何冊図書館で選んでいた。うちの学校の図書館はそれなりに蔵書が多い割りにはあまり人気がなく、

放課後にそこに現れるような奴はあまり居ない。

その日もたった数人の利用者のために図書委員はカウンターに座ってあくびをかいていた。

そこに座って携帯をいじくってる様な奴がなんで図書委員なんかやってるんだ。暇なら小説の一冊でも読めば良い。見識が広まるし知識もつく。暇つぶしも兼ねて一石二鳥じゃないか。お前の目の前の書庫に置いてあるその分厚い本は、紙の塊かなんかか？

なんて冷やややかな視線を図書委員に送っていると、それを遮るように人影が視界に写りこんだ。

「やる気のない図書委員だね。なんであんな人に受付をやらせるんだろう」

まるで俺の心の内を読み取ったかのように、その人物は言った。俺はまさか、内気な人物ばかりが集まるこの場所で声を掛けてくる奴がいるとも思わず、驚いてパツと顔を上げた。

「はじめまして」

そいつは、雲ひとつない青空みたいなさわやかな笑みを浮かべて、俺を見ていた。

「あ、ああ」

「吉澤君、だよな」

「そ、そうだけど」

なんで俺の名前を？

問いかけようとして開けた口を閉じた。そいつの手に持っている本に俺の視線は吸い寄せられる。

その俺の視線の先に気づいて、そいつ表紙をこちらに向けるようにしてその文庫本を差し出した。

「この本、知ってるよね。秋月玲の最新刊」

「知ってるもなにも」

それは俺がついさっきクラスメイトとやらかした喧嘩の、その火種となった本だった。

「吉澤君は秋月玲が好きなの？ それとも読んだのはこれだけ

？」

「秋月の作品は大体読んだよ。絶版になった短篇集とか以外は俺がいうと、彼はさわやかな笑顔を更に綻ばせた。そして興奮した様子で声を張り上げた。

「やっぱりそうなんだ！ 僕も秋月玲のファンなんだ。特に、月光町の夜が好きだな」

「ああ、秋月初期の作品か。確かにあれはいいね。今の秋月も好きだけど、初期の頃の荒削りで子供っぽい文章も、すごく味がある」

「そうそう！ いやあわかつてるなあ」

嬉しそうにはしゃぐ彼を尻目に、俺は冷めた視線を彼に送っていた。俺の頭には、先程教室で見たクラスメイトの顔が浮かんでいた。

俺が怒りに任せて奴の感想にケチをつけると、途端に彼はその作品を馬鹿にしたような態度で俺を罵った。

思い出すと、また行き所のない怒りがふつふつとこみ上げてきた。嬉しそうに笑う彼の顔を苦痛に歪ませてしまいたい。

頭の中に、言葉が浮かぶ。その言葉は彼を困らせ、不快にして、そして二度と僕の顔を見たくなくなるような意地の悪い質問。関係ない。まだ名前も知らない奴との仲が拗れた所でなんの問題もない。そう考えたときには、もうその言葉は口から自然に吐露されていた。

「具体的には、どの辺を魅力に感じたんだ？ その月光町の夜の、どの辺に？」

「え……」

途端に彼は、言葉を失った。貼りつけたような笑みは急に色を失ったように真剣な表情へと変わる。

やっぱりそうだ。

彼も秋月のファンとか言っただけはいるが、その実、作品の魅力なんて一切語れない。考えて、考えて、その末に出てくる感想はいつも決まったものだ。

設定がいい、とか雰囲気が好き、とか完成されてる、とかよく考えられた作品、とかそんなどこか達観したような中身の無い感想。俺はそんなものが聞きたいんじゃない。

俺は彼から目を逸らし、書架から本を選んでる振りをしながら次の言葉を待った。彼がテンプレート通りの感想を言ったらすぐに彼を無視して図書室をでようと考えていた。

しかししばらくしても彼は一向に口を開こうとしない。顎に手を当てたまま、思案顔で唸るばかり。

「そんな考えないと思いつかないのか？好きな作者の、一番好きな作品なのに？」

思わず口に出してしまった。自分でも意地の悪い言い方だと思った。でも耐えられないのだ。そんな中途半端な感情で、好きだとか、ファンだとか言われるのが。

怒り出すと思った。俺の心無い一言に、虚を突かれて、笑顔しか知らないその顔を顰めて、反論されると思った。

でも違った。

「ごめんごめん、思いつかないわけじゃないんだ。寧ろ、ありすぎて困っちゃったんだ。そういうの言葉にするのってすごく下手くそなんだよ、僕。どれを一番に語ろうか、どこで集束させようか。そんな事ばかり考えちゃってさ」

「気にするなよ、暇だからさ。好きな所を全部言ってくれても構わない」

どうせ何も思いつかない言い訳なんだろ、と思った。だからそんな強気な事を言ってしまった。

それが引き金だった。

「ありがとう。じゃあまず1章からんだけど、主人公のプロフィールがあまり語られないよね？ 大体最初の内に主人公の外見とか、性格とかを読者に伝えて、イメージしやすいようにするのが普通。でも月光町では違う。最も重要とも言える主人公の詳細はほとんど語られないんだ。でもそれに疑問を覚えるより早く、物語は



展開する。主人公は、どんな人物なんだろう。冒頭で読者が感じるそんな疑問を打ち消すような急展開。でもそれは勿論作者が忘れていた訳じゃない。この月光町の夜という作品に置いて、それこそが最大の伏線なんだ。それから第2章だけだ。」

俺は素直に驚いた。彼はほとんど暗記していたのだ。全13章からなる、決して短いとは言えないその作品の中身を殆ど。

本の解説から始まったその感想は、主人公の視線で語られる感想へとシフトし、そして次に登場人物全員の魅力をそれぞれあげていく。一番好きな人物と嫌いな人物をあげて、そしてどこが好きなのか、嫌いなのかを身振り手振りを交えて語る。

それは正しく熱弁であり、息継ぎをするのも忘れてるんじゃないかと感じるくらい、のべつ幕無しに作品の魅力を語り続けた。

ふと俺は、彼の解説に粗を見つけて、異論を唱えてみた。

すると彼は心底感心したみたいに、驚愕の表情で僕を見つめて、しかし自分の方が正しいと主張しかえしてきた。俺は溜まらずまた言い返す。

いつの間にか、討論になっていた。しかしそれは感情をむき出しにして、罵詈雑言を並べるような、さっきの教室での口論とは違う。純粹にその作品が好きなの同士が、その魅力について語り合う、文学のあるべき姿のような気がしたのだ。

「あの、すみません」

俺達は同時に、その声に振り向いた。そこにはさっきまでカウンターで欠伸をしていた図書委員が立っていた。

いつのまにか熱が入って、声を張り上げていたことにそこでやっと気づいた。秋月ファンの彼もそれを感じたのか、申し訳なさそうに頭を掻いた。

すると図書委員の彼女は控え目に、目を泳がせながら言うのだ。

「そのベランダで煙草をふかすシーンってもっと重要な気がします。あの時、ひとりになった彼は既に死を覚悟していたんじゃないかな。」今なら植物にだってなれる気がした”ってセリフは、今

なら死んでも構わない、っていう感情の現れだと思っんですけど」

俺と彼はお互い目を見合わせた。

それから、俺達は図書委員の彼女を交えて秋月作品に付いて何時間も語り合った。図書室にある秋月作品を全て机の上に並べて、実際にそれを読みながら考察する。一人では思いもよらない意見が飛び交って、俺はその度に目を見張った。

話が決着がつくと、遂には別の著者の作品へと話題はシフトしていった。

彼はどんな本のことでもよく知っていたし、図書委員の彼女も、それに勝るほどの知識を持っていた。そんなに本が好きなのに、何故図書室のカウンターで、所在なさげにしているのか聞くと「本を読んでいるといつの間にか寝てることが多いから」と舌を出して答えた。

「でもそれは退屈だからじゃないよ。本読んできると、話に集中して、すぐくのめり込みちゃうの。だから普段の生活より何倍も疲れるんだ」

その後もしばらくそうやって本の話に花を咲かせていたが、不意になる校内放送で俺たちは一斉に現実に戻された。

図書館のスピーカーからは蛍の光が流れている。

「もうこんな時間なんだ。全然気づかなかったよ」

彼は心底驚いたように腕時計を見つめた。

「ああ、私図書委員の仕事やらなきゃいけないのに！」

彼女は慌ててカウンターに走っていった。

「今日は楽しかったよ。ありがとう」

全く同じセリフを言おうと躊躇していた俺よりも先に彼はまた、さわやかな笑顔を浮かべて言った。「こちらこそ、ありがとう」そんな簡単な言葉が出てこずに、俺は黙って頷くだけだった。

「またね、吉澤くん」

彼は鞆を片手に、席を立った。俺はもう一度頷いて、その背中を見送った。

そういえば、なんで俺の名前、知っていたんだろう。

そんな疑問が頭にふと浮かんだ頃には、もう彼の姿は見えなくなっていた。

机の上に置かれた秋月作品を見据える。それは年季が入って日焼けしたものや、ビニールコーティングが施されたばかりのつやつやなものまで様々だった。窓から差し込む赤い陽がそれらを照らしている。

さっきまでの喧騒が嘘のように、今は深い静寂が図書室を包んでいた。

帰り際にカウンターで何やら書き物をしていた図書委員を一瞥する。すると彼女はパツと咲いた花のような笑顔を浮かべて言った。

「またね、吉澤くん」

彼と全く同じセリフ。僕は腹の中に抱えたあらゆる疑問を払拭できないまま、夕焼けで赤く染まった図書室を後にした。

いたるところに欺瞞と猫かぶりと人殺しと毒殺と偽りの誓いと裏切りがある。ただひとつの純粋な場所は、汚れなく人間性に宿るわれらの愛だけだ。

ふとそんな格言を思い出した。最初見たときはいまいちピンとこなかったのだけど、先日あった彼らと折りにふれ、その意味が初めて理解できた気がする。

われらの愛、というのを文学に対する愛に置き換えればいい。愛の形とは人それぞれで、それは人から人へと伝える愛だけとは限らない。あらゆる種類の愛が存在し、それは例外なく純粋なのだろう。

翌日の放課後も俺は図書室に足を運んだ。そこは変わらず閑散としていて、差し込んだ西日が漂う埃を光の粒子に変えて、揺らめ

いていた。

「今日もきたんだ、吉澤くん」

入ってきた俺に真っ先に気づいた図書委員の彼女は、やはり微笑みを浮かべた。

「あのひと、秋月のあいつは、来てないか？」

名前を聞きそびれていたので、彼女がわかるようにそう呼んだ。

「ああ、あの人。今日は見てないよ、というかね」

「なんだ？」

「今まで私、あの人図書室に来るのを見たことがないんだよ」

「へえ」

真剣そうに言う彼女とは対照的に、俺はあっけらかんと返事をした。カウンター近くの読書スペースに腰を下ろして、背中で彼女の声を聞く。

「この利用者ってすくないでしょ？ だから大体の人の顔は覚えちゃってたよね。だから普段来ない人がすぐにわかる」

「つまり、あいつは昨日はじめてここに来た？」

「多分ね」

「でもあんたも毎日そこに座ってる訳じゃないんだろ？」

「ほぼ毎日だよ。他に誰もやりたがらないから」

「へえ」

やっぱり彼女は本が好きなんだと改めて思った。そうでもない、と、そんな損な役回り、やりたがらないだろう。尤も、彼女は損な役だとは思っていないのだろうか。

「まあ読書家だからって必ずここに通うとは限らないしな。市立図書館のほうがここよりは蔵書も多いし、買って集めるのが好きな奴もいる」

「それはそうなんだけどね」

彼女はどこか含みのある感じで俯いた。

「なにか気になってるのか？」

「うん」

と彼女は顎に手を当てて、なにやら思案顔だ。

「もしかして、あの人、うちの生徒じゃないんじゃないかな」  
「は？」

あまりの突拍子の無さに俺は思わず声を上げてしまった。

「そんな訳ないだろ。図書室でみない顔だってだけで、飛躍しすぎじゃないか？」

「それだけじゃないの。私学校で彼の顔見たことない。吉澤君はどう？」

「俺もないけど。でも違う学年だったら顔知らないのも無理ないだろ」

「私は3年よ。吉澤君は2年でしょ？」

「じゃあ1年なんだろ」

「それはないよ。だって1年生は昨日、皆学校にいなかったじゃない」

「……あ」

思いだして、呟いた。確か昨日、1年生は新勧会かなんかだったな。

「どう思う？」

見ると、図書委員はカウンターに身を乗り出して俺を見つめていた。その顔はどこか不安げで、その大きな瞳をうるうると瞬かせていた。

「と、とにかく待つしかないだろ？ 会えばはっきりすることだ」

彼女から顔を逸らして、俺は手元の本に視線を落としながら言った。

しかしその後、何時間待っても彼がくることはなかった。例のごとく、スピーカーから蛍の光が流れると、俺は本を閉じて顔を上げた。

「こなかったね」

背後で声がした。周りを見ると図書室に残っているのは俺たちだけだった。

彼女の寂しそうな声と、静寂に包まれた空間が妙な寂寥感を感じさせて、押し黙る。

俺は小さく舌打ちをして、鞆を引つつかんだ。そして、足早に図書室を後にした。背後で図書委員が俺を呼び止めるように何か言っていたが、振り向かなかった。

翌日からの放課後、俺は秋月の彼を探すことにした。図書室は彼女に任せて、正門に立つ。学校から出るには、正門か裏門を通るしかない。塀やフェンスをよじ登るのを除いたら、の話だが指名手配犯じゃないのだから、いい高校生がそんな事はまずしないだろう。正門からワラワラと出てくる生徒を、花壇の縁に腰かけて注視する。時折怪訝な視線を向けられるが構わず続けた。

途中、先日教室で言い合いをした件のクラスメイトが現れて、俺の顔を見るやいなやバツの悪そうな顔をして、俺を避けるように足早に去っていった。

「なんだ、あいつ」

まるで喧嘩した恋人と鉢合わせしたような顔振だったが、まあ気のせいだろ。

人の出入りが疎らになると俺は本を読みながらその作業を続けていたのだが、校舎の方から蛍の光が聞こえてくると、俺は立ち上がってそのまま帰宅した。

その翌日、裏門で同じ事をしたがやはり彼の姿を見つけないことのできないまま、蛍の光を迎えた。途中、缶コーヒーを持ってトテトテと掛けてきた図書委員と並んで座り、それを呷りながら彼女の

横顔を見た。

「ん、どうしたの」

「いや。お前、図書館のほうはいいのか」

「いいよ、どうせ誰もこないし。っていうかさ！」

なんの前触れもなく、図書委員が立ち上がる。俺は驚いてコーヒ―を少し零した。

「私吉澤くんの先輩なんだよ！ お前はないでしょ、お前は」

「だって名前知らないし」

「名前くらい聞いたらいいでしょ？ほんと礼儀を知らない子なんだから」

腕を組んで頬を膨らます彼女は妙に子供っぽくておよそ年上には見えそうもない。口に出すとまた怒られそうなセリフを寸前で飲み込む。

「茜」

「ん？」

「私の名前」

「ああ、そうなんだ」

「茜先輩でいいよ」

「よろしくな、茜」

「もうっ！」

それだけで茜は不貞腐れてそっぽを向いてしまう。下から見下ろすと、短めのスカートから伸びた足が嫌でも目にはいつて、俺は彼女が見ていない間にそれを舐めるような視線で見つめた。俺がら変態である。

去り際に「みつかるといいね」と茜は笑顔を浮かべた。その背中を静かに見送って、読みかけの文庫本を膝の上に広げた。

「あんまり関係ない話なんだけどさ」

秋月の彼を探すことを半ば諦めかけてきていたある日のこと。

俺たちは図書室でぼおつと本を読みながら時間を潰していた。

「なんだよ、あつ」

だれかが入ってくる度に、二人そろってそちらを振り向いてしまつのは、やっぱり内心では諦めきれていないんだな、と俺は一人苦笑した。

「はずれ」

「うるさい。で、なに」

「ああ、知ってるかもしれないけどさ。秋月玲ってこの学校の卒業生らしいよ」

「マジで!?!」

読んでいた文庫本は放り出して、俺は茜を振り向いた。

「知らなかったんだ。10年くらい前って言ってたかな」

「そうなのか。それは初耳だ。すげえな……」

本当にすごいことだ。あの有名な秋月玲がこの出身だったとは。ということは秋月もこの図書館を使ってたのかな。

そう考えると、俺は今自分が座っている何でもないパイプ椅子がすごく高尚なものに思えて、背筋を伸ばして座りなおした。

しかし、卒業生か。

ん？

卒業生……？

「ああ!!」

「ど、どうしたの。大声だして」

「そうだ、卒業生だ! あいつはもしかしたらこの卒業生なんじゃないか!?!」

「あー」

言われてみれば、というように彼女は手を叩いた。

ここを何年前かに卒業した生徒が、制服を着て母校に忍びこむ。あり得ない話ではない。

「おい、ここ数年の卒業アルバムってここにはないのか?」

「うーん、ここにはないけど、確か資料室にまとめて置いてあ



った気がするよ。先生に言えば見せてもらえるんじゃない？」

茜が言い終える前に走りだしていた。

やっとみつけた手がかり。そうだ、彼にはまだ言いたいことが沢山ある。話したいことがまだまだあるんだ。こんな所で逃がしてたまるもんか。

担任に鍵を借りて資料室へ。年季の入った扉に鍵を挿し込む。

興奮に手が震えて、何回かやり直した後に刺さった鍵を回す。ガチャと小気味の良い音とともに鍵が開く。引き戸に手をかけると、少しの抵抗があつたがすんなりと開いた。

あまり使われていないせいか、カビ臭い饅えた匂いが漂っている。そこだけまるで時間が止まっていて、今この瞬間に動き出したような、そんな錯覚を受ける。

その狭い部屋にはテーブルと小さい椅子が一脚だけ置かれていて、まるで尋問部屋のようだった。

壁が見えないくらいにうず高く積み重ねられた教材や資料が歴史を物語っている。それはきつと、この学校ができた当初から変わらない唯一の場所なのだ。

部屋を見渡すと、それは拍子抜けするくらいにあっさりと見つかった。

卒業アルバム。

本年度から逆算してきつちり10年分の分厚いアルバムを机の上に置いた。年度順に並べるとアルバムの汚れは綺麗なシンメトリーになっているのがわかった。これがこの学校の10年分の歴史だ。新しい物から順番に開く。生徒の顔写真が大きく写っているページを入念に調べた。

彼の名前でも聞いていれば、もつと作業が楽なだけだ。

それでも根気よく、一人一人の生徒と睨み合いながら、見逃さないように慎重に探した。あの貼りつけたような笑顔が頭の中で思い出される。特徴的な顔立ちという訳ではないのに、どこか印象的なあの笑顔が、たった半日の時間をともに過ごしたただけなのに、数

日たった今でも鮮明に思い出された。

どんなに面白い本を読んでいる時でも、こんなに集中したことはなかったかもしれない。今俺の頭を支配するのは、彼の事だけだった。

1時間後。当ての外れて行き場を無くした9冊のアルバムが床に積まれている。俺は大きく息を吐いた。資料室はむせ返るような熱気に包まれている。アルバムに夢中で窓を明けるのさえ忘れていたのだ。

最後の1冊。いや厳密に言えばアルバムはまだまだある。しかしそれは勿論どんどん過去へと遡っていくのだ。

あの日、俺たちが図書室で語りあったあの日、俺と茜は彼がこの在校生であることを疑わなかった。勿論、卒業生が学校にいる訳がない、という先入観はあっただろうが、それでも卒業してから10年以上経っている男を高校生と見間違うとは考えにくかった。10年、それは年をとっても高校生にみえる最低のラインだと思えた。いや、10年経っても高校生に見えるなんて奴もそうそういるものじゃないのだけど。それでも俺はこの1冊に最後の望みを掛けるしかなかった。

これで見つからなかったら、彼を探すのをやめよう。文学の神様が俺たちに見せた、白昼夢だったのだと諦めよう。

「文学の神様か」

自分の言葉なのに、その響きがおかしくて俺は苦笑した。

もしそんなものが存在するとしたら、頼む。俺にもう一度、彼の顔を見せてくれないか。

大きく息を吸って、俺はアルバムに手を掛けた。

「……………え？」

そこには信じられないものが写っていた。俺は見間違いじゃないかと、無意味にページを繰ったり目を擦ってみたりしたのだが、

その写真と文字は、変わらずそこにあった。

俺が開いたページ。生徒一人一人の顔写真がアップで映されているその左上の部分。そこには確かに、あの日、図書室で出会った彼の顔があった。それはあの時とにも変わらない、快晴のような笑顔。どこか人懐こさを感じさせる顔。

あった。あったのだけど、俺が驚いているのはその写真を見つけたことではなかった。

この写真は、確かにあの生徒のものだ。見間違いがなくドンピシャリだ。だけどそれが寧ろおかしいのだ。

もし彼が10年越しにここの制服を着てやってきたのだとしたら、その時の彼とこのアルバムの写真が全く同じというのはおかしい。だってそうだろ、あの時の彼はこのアルバムの写真をとってから丸10年、歳をとっているはずなのだから。

いやまあそれはいい。恐ろしく童顔なのか、それともメイクかなにかで皺や染みを隠していたとも考えられる。それよりももっと驚くべき材料がそこにはあった。

「秋月玲？」

そう、彼の顔写真のその下。生徒の名前が書いてあるであろうその部分に書かれていたのは”秋月玲”という文字だった。

茜は言っていた。秋月が10年くらい前の、卒業生だと。だとしたらこの笑顔の少年が秋月玲だということはまづ間違いがないだろう。

だとしたら俺たちは、秋月玲と共に秋月作品について語り合っていたことになる。

「ああ……」

なんとも言えない感情を胸に、俺は走りだしていた。気が違えてしまったのだろうか。信じられない。茜にも見せて、確かめてもらおう。

「茜、これを見る！」

そこが静謐を強いられる図書室だということはもう関係なかつ

た。俺は腹から出した声で茜を呼んだ。

「あ、よ、吉澤……くん」

「茜、みてくれよ、これ！」

「それどころじゃないよ、見て」

それどころじゃないってなんだよ。こつちもそれどころじゃないんだ。

無理やり茜にアルバムを見せようと手を引っ張るが、彼女のため事ではない様子に気づいた俺は、茜の指差した方に目を向けた。

窓からは真っ赤に染まる夕日が差し込み、窓際の読書スペースを照らしている。スチールのテーブルにそれが反射して、眩しい。俺は目を細めた。

そこには男が座っていた。半袖のカッターシャツに黒のスラックス。顔は逆行でよく見えないが、20代半ばの痩身な男性のようだった。

「だれだ？」

「……わからない？」

なにをもったいつけているのか、と茜を糾弾しようとした。けれど俺はふと思いつく。

今まで何十回も、何百回も見ただであろうその顔を。

秋月作品の巻末に載せられた作者近影の写真。それと全く同じ人物が、そこに座っていた。

「秋月……玲……」

手からアルバムがこぼれて、床にドスンと衝突した。その音にふと俯いていた彼が顔を上げる。

「やあ、はじめまして」

その声を聞いて、俺は彼の顔を思いだす。快晴のような笑顔を向けて、秋月の新作を俺に差し出した彼の顔を。

「秋月、玲？」

「僕を知っているのかい？ 光栄だな」

彼はすくつと立ち上がり、俺に歩み寄る。

するとさつきまで臃げだった顔がより鮮明に目に写る。

その手には秋月玲の文庫本。そして俺の前で立ち止まった彼はそれを俺に向けて差し出した。

「新刊、読んでくれたかな。あ、いや、まだだつたら是非借りていってよ。何冊かここに寄贈したからさ」

控えめだけどこか自信を感じさせる包容力のある仕草。俺は彼の顔が直視できず、俯いたまま、言った。

「本当に、秋月玲なのか……」

その問いにしばらく沈黙が流れる。俺は外来客用のスリッパをはいたその足をただ見つめて、答えを待った。

「そ、そうだけど、イメージと違つたかな？ 写真写りはいいほうだつてよく言われるんだけど」

ふと頭をあげると、文庫本の近影と同じ清まし顔で固まる秋月玲がいた。顔の横で開いた文庫本がプルプルと震えている。

「どうだい、君の知つてる秋月だつたかい？」

「……はい」

もうなにがなんだかよくわからないけど、ただすごく泣きたい気分なんだつてことは理解できた。だから俺は泣いた。今まで貯めていた全部を吐き出す勢いでただ涙を流し続けた。

しばらくして落ち着いた俺は、秋月に導かれて窓際の読書スペースに腰を下ろした。俺の隣に茜が、そして向かい側には秋月が座る。

「ここの図書室で、よくプロットを書いたものだよ。ここは今と変わらずやっぱりいつでも閑散としていて、いつつも図書委員の女の子と二人つきりだった」

しばらく窓の外を眺めていた秋月は、ふと遠い目をして語り始めた。その声はとも落ち着いていて、まだ30前だというのに、安楽椅子に揺られる老人のような雰囲気漂わせていた。

「暇を持て余した彼女は今丁度君が座っているところに腰を下ろして、興味津々に僕のプロットを読んでいたな」

と秋月が見る。もうさつき程緊張はしていないものの、それでも胸は高鳴っていたし、足は震えていた。声は上手くでてこない。それに秋月玲の顔は、写真でみるよりもずっと男前だった。高校時代の面影はちゃんとあるが、無精ひげをはやしていたり髪型が違ったりで一目で成長の姿が見て取れる。

俺は泣きはらして腫れぼったい目で秋月の顔を見据えた。

その瞳には何が映っているのか。俺たちと見ている景色をどんな風に彩っているのか。

俺の視線にすこし戸惑って、そして恥ずかしそうに窓の外に視線をそらす。秋月玲は照れていた。

「僕がプロとしてデビューが決まった時、彼女は自分のことのように喜んでくれた。その時の笑顔をいまでもよく覚えているよ」ひとしきり話終わって、秋月は昔を懐かしむように書架を眺めていた。俺は思い立って彼に尋ねる。

「あの秋月先生。あなたは、この間、ほんの数日前にここに来ませんでしたか？」

「数日前？ いやここ最近仕事で家に籠っていたからねえ」  
やっぱり彼は秋月じゃなかったのだろうか。でもあのアルバムの写真は？」

「でも、どうして？」

俺と茜は、あの日のことを簡潔に秋月玲に話した。

「なるほどね」

そう言って彼は腕を組む。なにやら思索しているようで、「うーん」と唸っている。

「もしそれが本当だとしたらきつと、この学校を懐かしんだ僕の魂が、君たちに会いにいったのかもしれないね」

そういう秋月の顔は真剣そのもので、冗談を言っているようにはとも見えなかった。

「魂つて、先生まだ生きてるじゃないですか」

茜が笑いながら言うと、それもそうだね、と秋月は頭を掻いた。

「だったら文学の神様だ。吉澤くんが抱えていた悩みを払拭するために現れた文学の神様。これだね」

「俺の悩み？」

「そう。それも文学にまつわるね。あるんだろ？」

「なんで、わかるんですか？」

そうだ俺はずっと悩んでいたのだ。悩んで悩んで、失意の底にいた俺を助けたのは、他でもない高校生の秋月玲だ。俺はあの日、彼に救われたのだ。

「紛いなりにも文学を志した人間だからね。いわば同類だよ。

一目でわかったね、君が思い悩んでいることくらい」

「からかわないでくださいよ」

秋月は控えめに声を上げて笑った。そしてふと秋月は立ち上がる。釣られて俺と茜も席を立った。

「そろそろ行くよ。良い息抜きができた、ありがとうございます」

「こちらこそありがとうございます」

俺たちは揃って深く頭を下げた。

去り際に秋月は俺に顔を寄せて耳打ちした。

「夢が成就することを願っているよ」

それは夢のように過ぎていった。

秋月玲が図書室に現れてしばらくしてからのことである。いつものように図書室で茜と本の話をしながら秋月玲が寄贈した、既に絶版になっている彼の短篇集を読んでいたところ、図書室のドアが勢い良く開いて、見知っている顔の生徒が踏み行ってきた。

「吉澤はいるか!？」

「図書室では静かにしてください」

茜に出鼻を挫かれ、たじろぐそいつは俺の元にやってくる。

両手いっぱい抱えていた文庫本を、俺の目の前の机にドスンと下ろした。

「秋月玲の本、全部読んだ」

と威勢よく言ったそいつは、先日俺と教室で喧嘩したあのクラスメイト。名前は確か、小暮。

「ふーん、で？」

「全部の作品の感想、言えるぞ？」

「すごいすごい」

「試しに語ろうか？」

「いや、遠慮しとくわ」

「ふざけんな！！」

「まあまあ、落ち着いて」

俺に掴みかかろうとする小暮を茜が背後から羽交い絞めにする。

「お前ら、知り合いか？」

「知り合いもなにも」

小暮がつぶやく。茜は決まり悪そうにもじもじとしている。

「私達、姉弟なんだ」

「まじか」

「まじだよ」

小暮がつまらなそうに呟いた。

驚くべき事実。文学少女の姉に不良真つ盛りの頭の足りない弟。まあ似ていると言えば似ているのかもしれない。

「この子、あなたと喧嘩した日、妙に機嫌悪くてさ、何事か聞いたの。そしたらクラスメイトと喧嘩したって。理由きいたらびつくりよ。流し読みしただけの本を面白って絶賛したら怒鳴られたっていうんだもん」

「流し読み？」

小暮を睨みつけると、姉に背に隠れるようにして身を引いた。

「だから怒ったのよ。その子はちゃんとした感想が聞きたかったんじゃないかって。そしたらこの子、次の日に秋月玲の作品全部



買ってきたんだよ。おかしいよね」

「なんでだよ。やるからには徹底的にやらねえと格好がつかねえだろ」

「まあこの子の話聞いてて相手は吉澤くんなんだなって大体想像ついてたんだけど、黙ってたんだよね。その方が面白いかなって」

「なに、姉貴達知り合いだったの？」

「恋人同士だ」

「嘘だろ!？」

俺が嘯くと小暮は何故か握りこぶしを携えて俺を睨みつけた。

もしかしてシスコンか、小暮よ。

「まあとにかく、弟の努力に免じて、許してやってよ」

茜が両手を合わせる。弟もその後ろで俺の表情をチラチラと伺っていた。

「許してやってもいいよ。でもテストをさせてもらおう」

「テスト？」

小暮が茜を押しつけて踊り回る。

俺はカバンの中の紙束を取り出して、机の上に置いた。

「これ読んで感想を聞かせてくれ」

「なんだこれ」

小暮が不思議そうに紙束を持ち上げる。茜も肩越しにそれを見る。

「吉澤くん、これ」

茜の声に、俺は黙って俯いた。頬は紅潮して動悸は激しく高鳴っている。二人の反応に、耳を欬てる。

秋月玲に会ったときもこんなに緊張しなかっただろう。今俺は試験に挑んでいる。これを通り切ることが、夢への第一歩だ。

遠くで秋月の声が聞こえた気がした。

鈴を転がしたような、人懐こさを感じさせる声。そしてその快晴の笑顔が頭に浮かぶ。

彼は俺たちを引き合わせてくれた。俺に一步を踏み出す勇気を

与えた。それはなによりも尊い経験で、これからもずっと忘れることとはない。

茜と小暮の表情を伺う。

それを読み終わった時の、二人の反応がどんなものであれ、それは俺の貴重な経験として記憶に刻み込まれるだろう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6439s/>

---

図書室のヴァレンシュタイン

2011年10月7日22時41分発行